

調査員のコラム

「1年を振り返って」

子どもの権利調査員 大久保 誠

子どもアシストセンターで調査員としての活動を始めて1年。育児経験のない私に果たして子どもや親の気持ちが理解できるのだろうか。弁護士である私の本職で子どもと接する機会の代表的なものは非行少年の弁護であるが、それとてその活動件数は多くはなく、しかも、大人とは勝手が違って、どうも子どもに対しては恐る恐る対応してきた感がある。そんな不安を抱えてのスタートでした。

調査員の本来的活動は、子ども・保護者と学校とのトラブルの調整や救済申立てがあった際の事実調査や調整です。私もすでに救済申立てのあった事案で調査・調整活動に当たり、残念ながら解決にいたらなかったものもあれば、うまく調整ができて生徒が無事復学できるという経験もしました。

それ以外に、調査員としては、相談員が毎日のように受ける相談のレポートを読むことが数多くあります。学校でのいじめ、先生への不満、親子関係の悩みなど色々な相談が毎日のように寄せられます。中には数年にわたって相談をされる方もいます。そのようなレポートを読むにつけ、果たして私の小さなときはどうだったのだろうかと思い返されます。

私は、日高管内の小さな町に生まれ、小学校に入学したのは東京オリンピックが間近に迫った日本が高度成長期に入りかけのころです。高度成長期に入りかけたとはいえ、道路は舗装もされず、車が通るたびに土煙がもうもうと立ち込めるような状況でした。地域の産業といえば水産業や軽種馬や水田畑作の農業が主たるもので、親がこのような仕事についている子が多かったため、小学校・中学校とも、田植えの春は農家の子が、昆布漁の夏は浜の子が家の仕事の手伝いをしてそれぞれ堂々と遅刻します（遅い時にはお昼休みに近い時間に登校します）。勉強もあくせくすることはありませんでした。高校も、特に考えることなく地元で唯一ある普通高校に入学しました。こうした極めてのんびりした学校生活だったので、今振り返ってみても、いじめや先生への不満などというのはなかったように思います。札幌と比較すれば何もないと言ってよい田舎ですが、これはこれで何と幸せなことだったのかと思います。

今も故郷での学校生活が私の時代と変わりがないのかは分かりません。できればそうであってほしいのですが。

私の体験とは異なり、今現在の札幌の子どもたちの悩みは何と多いことか。その悩みの解決に少しでも役立てることができたらと、微力を尽くしていこうと考えています。

「アシストセンターに感謝！」

子どもの権利相談員 鈴木 文夫

「どうやって、この子の悩みを受けとめ、励まし、勇気づけられるだろうか？」

「どうしたら、心にゆとりを持たれて、お子さんの未来へと目を向けてくださるだろうか？」

相談者が発する「失意、焦り、苛立ち、怒り、不安、…」等のマイナスエネルギーを、少しでもプラスなものに変換して送り返したい。アシストセンターに勤務するようになってからは、そんな願いを持って子どもたちやその親御さんの悩み相談に应运てきました。

3年前、中学校の教員だった私の生活は、大きく様変わりしました。給食が無くなり、ノーネクタイでの地下鉄出勤。一日 12 時間ほどあった執務時間が半分ほどに。ビルの一室で電話やパソコンとにらめっこする毎日。子どもたちの歓声など何も聞こえぬ静寂さの中で、ゆったりと時間が過ぎていきます。年間数回の「あしすと出前講座」の講演に出かける時だけが、唯一、懐かしい「学校の匂い」を嗅ぐことができる機会でした。

アシストセンターの相談員は、サポーターでもなく、ヘルパーでもなく、アドバイザーでもなく、コーチャーでもなく、カウンセラーでもありません。でも、場合によっては、サポートしたり、ヘルプしたり、アドバイスしたり、コーチしたり、カウンセリングしたりもします。アシストという言葉は、アシスタント（助手）の動詞形ですが、相談員としての仕事を重ねるうちに、その果たす役割には広くて大きなものがあることに気づかされました。

幼児から小中高生、また、その子育てに携わる親御さんたち。人それぞれの悩みは千差万別で尽きることはありません。その悩み相談に应运るためには、中学校教員としての経験が少しは役立ったものの、むしろ一から学び直さなくてはならないことの方が多かったように思います。子育て、発達障がい、ネットトラブル、カウンセリングやコーチング等々に関する専門書から家族愛・友情・思春期の悩みや憂い等をテーマにした小説の数々まで、手当たり次第に読み漁りました。その中から、印象に残った「数々の文言」や納得のいった「ものの見方や考え方」等を抜き出し整理してみると、それが相談を受ける際には一番の「虎の巻」になってくれました。

そうは言っても、心に寄り添う相談は簡単なものではありません。アシストセンターに寄せられる悩みごとは、その内容も深刻度もまちまちで、一つとして同じものがないからです。いくら相談経験を積み重ねても、いつも初心者のようなドキドキ感がつきまとうのです。自分の非力さを嘆き、正直投げ出したくなることも何度かありました。ただ、私の場合、二児（娘と息子）の「子育て失敗談」や現在進行形の「育ジイ奮闘記」を盛り込むことで、何とか対話の穂を継ぐことができたように思います。素人相談員ならではの乱暴なやり方ではありましたが、相談者と同じ土俵に乗ってその悩みに寄り添おうと自分なりに努めました。

ともあれ、アシストセンターに別れを告げる時がやってきました。ちょっぴり寂しく、離れがたい思いが心の片隅にあります。人生における第二の職場でも、札幌市の子どもたちに関わる仕事ができ、今、「アシストセンター」に感謝の気持ちでいっぱいです。

相 談 員 の コ ラ ム

相談員として

子どもの権利相談員 高橋 カ

「相談いいですか?」、今にも消え入りそうな声の電話相談。「アシストセンターですか?」、短い一文から始まるメール相談。「こんにちは。」、不安そうにアシストに来る面談等々、相談の形は様々ですが、初めてアシストに相談する時は、とても勇気が必要です。

私たちは寄せられた悩みごとに対して、電話やメールの向こう側の子どもを思い浮かべながら、自分の力で解決していけるように相談に当たってきました。

ア「アダルトサイトを見てしまった。お金の請求が来るだろうか?」等と、インターネットに関わる相談がありました。子どもには携帯の危険性を話し、保護者には出前講座で、我が子に起きたネットのトラブルは、親が契約しているので連帯責任を負わなければならないことを話してきました。

シ「死にたい。」と訴える相談はとても重く、勉強会で学んだことを念頭に、相談者に寄り添いながら死にたい気持ちを話してもらい、身近な人にも相談するように促したり、一緒に考えたりして、辛い気持ちを和らげるように心掛けてきました。

ス「好きな人ができました。」のような恋愛相談もありました。年頃ですから当然で、異性を理解する第一歩です。ただ恋愛感情だけではなく、人として誰からも好かれるより誰かを好きになること、もっと素晴らしいのは、誰でも好きになることと、人間性についても触れてきました。

ト「友達がいません。」等、友人関係に悩む相談も数多くありました。本当の友達とは、長所も短所もありのままに分かりあって、それでも付き合っている関係なので、友達探しからじっくりと友達選びをするように助言してきました。

セン「先生が嫌いです。」等、教師との関係についての相談もありました。人間ですから教師と馬の合わない人がいて当然であり、大人になっていくためにも、先生とどう接して行くか今は勉強中であると励ましてきました。

ター「いじめのターゲットになっています。」といういじめ相談には、一人では解決できる問題ではないので、我慢をするのではなく、必ず親や担任に相談をすること。そして、解決できなければアシストも味方になり、相談者を支える一人であることを話してきました。

相談が一度で解決することもあるけれど、二度三度にわたるときもあります。中には長期にわたる場合もあります。稀に未解決のままに相談が途切れる場合があり、その後の様子がとても気になる子もいます。

相談が解決して、「ありがとうございました。」という返信が来たり、「不登校でしたが少しずつ学校に行けるようになっていきます。」という報告があったりすると、相談員冥利につきます。

これからも、当センターでは、ゴール（という問題解決）につながるシュート（自らの行動）を成功させるために、絶妙のタイミングで、パスを出してあげられる役割を相談員が実行していきます。

「いたずら電話」

子どもの権利相談員 小川 真紀

「あのお、いじめられているんですけど。」時折、妙に明るい声で相談電話がかかってくることもある。推定中学生男子、周りで複数人ゲラゲラ笑う声が聞こえる。こんな時はまず、いたずら電話を疑う。もしかすると強がり或不真面目な話し方をしているのかもしれない、周囲の子からいたずら電話をかけるように強要されているのかもしれない、などと用心しながら対応するものの、話のつじつまが合わず、具体性も全くないことがほとんどだ。やはり決め手は声色で、ふざけていると判断すればいたずら電話として対応をすることになる。以前一度、ボイスチェンジャーを使った新手のいたずら電話があった。最後には「オマエ、ツカエナイ・オマエ、ツカエナイ…」と連呼されて電話が切れた。受話器に向かって「ばかやろー！」と叫びたい気分だった。たいてい、いたずら電話は早々に切れるが、日に何度も（恐らく）同じ集団からかかってくることもある。困っている子どもやその周辺の大人の力になりたいと真剣に臨んでいる身にとっては、本当に腹が立つものだ。電話を切った後は、「いたずら電話だった！まったくもう！！」と他の相談員に愚痴を言い、怒りを共有してもらってようやく気持ちを収めるのだ。アシストセンターでは、ひと月に30件前後のいたずら電話とおぼしき電話がかかってくる。便宜上、無言電話もいたずら電話の件数に含まれているので、上述したような電話は少数派なのだが。

いたずら電話はどんな心境でかけてくるのだろうか。集団でいたずらすることで仲間の結束を強めたり、自分の居場所の確認をしたりしているのかもしれない。大人をからかい、自分を優位に位置づけることで大人の仲間入りをしようとしているのかもしれない。現実の社会的場面で大人をからかいの対象にするのはリスクが高い。例えば、先生にそんなことをしたら自分の評価が下がるし、第一目をつけられて厄介だ。匿名が許される電話相談員なら恰好のおちょくり相手、とこんなところだろう。受け手としてはまことに腹立たしい。しかし、考えてみると自分だって思春期の頃、一面的な考えで大人に懐疑的になったり、自我肥大をおこしてむやみに大人を見下し、大人に不毛な挑戦をしたりしていたではないか…怒りが収まった後には、そんな昔の自分を思い出したりもする。発達心理学者として知られるエリック・H・エリクソンのライフサイクル論によると、13歳くらいからの課題は、自我同一性の確立であるらしい。つまり、自分が何者であるかの問いに、自分なりの答えが出せること、と言い換えられるだろうか。その問いの答えは、保護者の見守りの元で生きてきた子どもが、自立の道に向かいだす礎となるだろう。いたずら電話は、子どもたちの大人に成長する健康的な営みの一部に感じられなくもない。というのは私のこじつけだろうか…

だいぶ大人になってしまった私が思春期の子どもの気持ちに添うのは時として難しいことだった。アシストでの活動は、私の中にかすかに残る思春期心性を忘れないように、との戒めを与えてくれた。力になれなかったケースもあり、申し訳なさも残る。この気持ちを元に、今後とも精進していきたいと思っている。